

## 『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖（20） 千鳥ゝ鳥―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「千鳥」から「鳥」までの題に配されている出典未詳歌、八首について注釈を施す。

## 凡 例

一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかった歌について注釈を加えるものである。本稿では八首を収めた。

二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を（ ）を付して記す。

三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。

四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を（ ）に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称（永）
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称（松）
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称（和）
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称（羅）
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称（林）
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称（宮）
- 田林義信氏旧蔵本 略称（田）
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称（黒）
- 寛文九年版本 略称（寛）

なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き

資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

（永）細川家永青文庫叢刊3『古今和詞六帖（下）』（汲古書院、昭和五十八年一月）所収の影印

（松）島原図書館蔵肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料  
（寛）架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書）とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、千鳥く鳥題の歌（四四五四く四四七九番）の別出歌一覧を付す。

## 注釈

四四五四（千どり）

【本文】

み山にはくもゐたなびき明けにけり川のせごにちどりしば鳴く

【校異】なし

【語釈】○み山「み」は美称の接頭辞。○ちどり 千ドリ科の鳥の総

称。当該歌のように、朝鳴く声がしばしば和歌に詠まれる。『古今六帖』

における千鳥題は、第三帖（一九二八く一九三三番）にもあり、全六首のうち、一九二八・一九二九・一九三一・一九三三番の計四首が出典未詳歌と見られる。○しば鳴く しきりに鳴く。絶え間なく鳴く。

【通釈】

山には雲が棚引き、夜が明けたよ。そういえば、川のどの瀬にも、千鳥がしきりに鳴いているよ。

【他出】なし

【考察】

『万葉集』の長歌、「あしひきの み山もさやに 落ち激つ 吉野の川の川の瀬の 清きを見れば 上辺には 千鳥しば鳴く……」（巻六・九二五・九二〇）に、「み山」「川のせ」「ちどりしば鳴く」といった語句が共通し、情景にも相通じるものがある。

中でも「ちどりしば鳴く」という表現は、万葉歌に他にも、「ぬばたまの夜のふけ行けば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」（万葉集・巻六・九三〇・九二五）、「明けぬべく千鳥しば鳴く白たへの君が手枕いまだ飽かなくに」（万葉集・巻十一・二八一・二八〇七）、「我が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよ我が一夜づま人に知らゆな」（万葉集・巻十六・三八九五・三八七三）という例がある。平安期には「むばたまのよやふけぬらむはらへどのかはさりさにちどりしばなく」（躬恒集・二七〇）といった歌が見え、『古今六帖』にも「大井川心しがらみかみしもにちどりしば鳴く夜ぞふけにける」（第三・一六三四・しがらみ）という歌があるが、用例数としては多くない。

また、「くもゐたなびく」という表現も、「香具山に雲居たなびきおほほしく相見し児らを後恋ひむかも」（万葉集・巻十一・二四五三・二四四九）

の他、『万葉集』に集中して見られる。

『万葉集』の現存諸本においては、当該歌の出典となる和歌を未だ特定し得ないが、これらの万葉歌の表現を踏まえながら、一首の和歌にまとめられた可能性はあろう。

なお、「み山」に「たなびく」「くも」は、平安期においても、「しらくものたなびきにけるみやまにはてる月影もよそにこそきけ」（伊勢集・二四五）といった例を見出す。

「川のせごことに」という句は、『万葉集』では、「……み吉野の 真木立つ山ゆ 見下ろせば 川の瀬ごとに 明け来れば 朝霧立ち 夕されば かはづ鳴くなへ……」（万葉集・巻六・九一八・九一三）といった自然の情景を詠むこともあるが、平安期に入ると、「おほぬさの川のせごことにながれても千年の夏はなつばらへせん」（貫之集・一三三・六月ばらへ）、「みそぎするかはのせごことにひくあみをおほぬさなりと人やみるらん」（能宣集・八七・六月、かはづらにはらへする所、あみひき、うなどかふ）など、水無月祓の場面で用いられるようになる。この点においても、当該歌は、『万葉集』の詠みぶりに近いと言えよう。

四四五六（千どり）

#### 【本文】

おほ空にわたる千鳥の我ならばおふ<sup>（を）</sup>のわたりをいかになかまし

【校異】 ○をふーおふ（松・羅・田）<sup>本</sup>をふ（寛）

【語釈】 ○おふのわたり 未詳。「わたり」を辺りと解すると、出雲国の「飢宇の海」の辺りか。なお、地名「おふ」には、掛詞となる語を指摘すべきであろうが、判然としない。仮名遣いの揺れを考慮して、「生ふ」

「負ふ」「追ふ」などが想定される。ここでは、千鳥が群れを成して飛ぶことから、他の千鳥たちを「追ふ」（後から追いかける）意と解した。後考を俟つ。○いかになかまし「まし」は、疑問詞「いかに」と呼応して、実行を迷う意を表す。

#### 【通釈】

大空を飛び渡る千鳥が、もし私だったら、「おふ」の辺りを、仲間を追いかけて、どのように鳴いて飛んでいこうか。

#### 【他出】 なし

#### 【考察】

「おほ空にわたる千鳥」の類想は、「あまのはらわたる千どりのはねたゆみきしをかはともみてかへるかな」（重之集・一八三・あるやむごとなきところになめせばまゐりたり、昔にならひておまへにいでたれば、なにごともなくてかへさるるにつけてきこゆ）という歌にも見出せる。『重之集』歌の場合も、千鳥は、貴顕に召されたものの、そのまま帰されてしまった作者自身であり、ほんの小さな、心細い存在としてのイメージは、当該歌に通じるものがあるうか。

「我ならば」という句を第三句に置く歌としては、「うたがたも言ひつつもあるか我ならば地には落ちず空に消なまし」（万葉集・巻十二・二九〇・八・二八九六）、という万葉歌の他、「はなのうへにちりくるゆきの我ならばいかにうれしきいのちならまし」（重之集・七三・正月ばかりに、むめのはなにゆきのふりかかりたるを、よのうき事をおもふころにて、「たかさごのをのへのまつのわれならばよそにてのみはたてらざらまし」（重之集・一一三・うらみ十）などが見える。「まし」とともに用いられる歌も少なくなく、他のものに託して「我」の心情を述べ

る表現である。また、『重之集』の二首は、体言に助詞「の」が付き、「我ならば」と続くという構造が一致している。

「おふのわたり」は、未詳ではあるが、「飫宇（おう）の海の川原の千鳥汝が鳴けば我が佐保川の思ほゆらくに」（万葉集・巻三・三七四・三七一・出雲守門部王、京を思ふ歌一首）という歌に見える、出雲国にある「飫宇の海」は、千鳥とともに詠まれている点、当該歌との関連性が指摘できよう。また、「をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはむ」（古今集・東歌・一〇九九・伊勢うた）の「をふのうら」も、千鳥は詠まれないが、参考になるか。

四四五八（千どり）

# 【本文】

山川のいしまがくれにすむ千どり人しれねばやこゑのきこえぬ

【校異】 ○いしまくれ―岩間かくれ（黒） ○人しれねばや―人しらねはや（宮）

【語釈】 ○山川 山の中を流れる川。 ○いしま 石や岩の間。 ○人しれねばや「人しれず」は、人目につかないように、ひそかに、の意。「ね」は打消「ず」の已然形で、接続助詞「ば」が付いて、順接確定条件を表す。「や」は疑問。

# 【通釈】

山中を流れる川の、石の間に隠れて棲む千鳥は、人に知られないからか、声が聞こえない。

# 【他出】

『夫木和歌抄』巻第十七冬部二、六七五一番

題不知、六六 読人不知

山河のいはまがくれになくちどり人しれねばやこゑのきこえぬ

『和歌童蒙抄』第八鳥部、七五四番

やまがはのいしまがくれにすむちどりひとしれねばやこゑのきこえぬ

# 【考察】

千鳥は、その鳴き声を和歌に詠まれることが多い鳥であるが、石の間に隠れて姿を見せない千鳥は、その存在を人間に知られないことを不満に思い、鳴きもしないというのであろう。

「山川」の「いしま」は、「山がはのいしまをわけて行く水はふかき心もあらじとぞおもふ」（人丸集・二四三・東海道十五ヶ国 しま）、「山川の水の流れをかきやるにいしまをしげみゆかぬことのは」（康資王母集・一五三）という例に見られるように、川の流れを詠むことが多い。だが、「なつかはのいはまをわくるいはちどりつひにさてやはよをばつくさむ」（忠岑集・二二）という例では、岩場に住む千鳥が詠まれており、当該歌と共通する情景が見出せる。もともと、私家集注釈叢刊9『忠岑集注釈』（藤岡忠美氏・片岡剛氏、貴重本刊行会、平成九年九月）に拠れば、『忠岑集』の「いはちどり」は、「いりちとり」「いそちとり」の校訂本文である（四四〇四六頁）という。だが、同書が指摘するように、『兼輔集』六四・六五番にも「いはちどり」の例があり、「いはちどり」の語の認定は妥当であろう。『忠岑集』歌は、「いはちどり」の「いはまをわくる」姿に人生を投影しているが、当該歌も、「いしまがくれにすむ千どり」に、恵まれない境遇を重ねているとも解せよう。

なお、「人しれねばや」という句は、『古今六帖』にも他に、「君こふと人しれねばやきのくにのおとなし川のおとにだにもせぬ」（第三・

一五五一・かは) という歌がある。

結句「こゑのきこえぬ」の例は、「ほかにまた待つ人あればやほととぎす心のどかに声のきこえぬ」(民部卿家歌合・一五・八番 左)、「郭公さゐるかきねはちかながらまちどほにのみ声のきこえぬ」(後撰集・夏・一四九・う月ばかり、友だちのすみ侍りける所ちかく侍りて、かならずせうそこつかはしてむとまちけるに、おとなく侍りければ)、「風さむみたににこもれるうぐひすのうちとけてなくこゑのきこえぬ」(堀河中納言家歌合・一七・うぐひす 左) などがあり、当該歌の千鳥の他、鶯や時鳥の声を採り上げた歌がある。

四四六一(千どり)

【本文】

いとどい<sup>(ふ)</sup>とどものおもひをればかはちどりのにも山にもなきみだれけり

【校異】 ○いと、くーいと、く<sup>(朱)</sup> (宮) いと、しく (黒・寛) ○もの

おもふ<sup>ひ</sup>ものおもひ (永・宮) 物思ひ (松・和・羅・林・田・黒・寛)

○なきみたれけり―鳴みたるなり (松・田) 啼みたるなり (羅) 鳴みたれけり<sup>(朱)</sup> (宮)

【語釈】 ○いとどいとは 程度が更にはなはだしいさまを表す「いとど」を重ねた表現。 ○かはちどり 川辺に集まる千鳥。 ○なきみだれけり

「なきみだる」は、やかましいほどに激しく鳴く意。「けり」は気づき。

【通釈】

一段と深く物思いをしていると、気づけば、川千鳥が、野にも山にもやかましく鳴いているよ。

【他出】

『夫木和歌抄』 卷第十七冬部二、六七八六番

千鳥、六一 読人不知

いとどしくものおもひをればかは千鳥のにも山にもなきわたりけり

『和歌童蒙抄』 第八鳥部、七五五番

大伏女王(大伴女郎)

いとどしくものおもふをりはかはちどりのにもやまにもなきみだれつつ

【考察】

当該歌は、『和歌童蒙抄』では万葉歌と見なされており、『校證古今歌六帖』(石塚龍磨稿、田林義信編、有精堂、昭和五十九年四月)頭注にも、「此うた童蒙抄卷八に萬葉集の歌なりとある。」と指摘されている。

普段よりもさらに物思いをする時には、「いとどしく物思ふやどの萩の葉に秋とつげつる風のわびしさ」(後撰集・秋上・二二〇・おもふこと侍りけるころ) という歌にも詠まれるように、物音によって、その立場をあらためて認識することがある。この『後撰集』歌では、風は「秋(飽き)」を告げるものであるが、当該歌では、川千鳥が野山でも激しく鳴いている声に気づいて、あらためて、深い物思いをしている自分に気がついたと解した。

「ものおもひをれば」という句の用例は、『古今集』に、「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」(夏・一五三・紀とも)のり・寛平御時きさいの宮の歌合のうた) という歌が見える。八代集中、唯一の例である。時鳥を呼んだこの『古今集』歌は、当該歌の発想と通底するものがある。



「かはちどり」は、すでに『万葉集』に、「川千鳥住む沢の上に立つ霧のいちしろけむな相言ひそめてば」（巻十一・二六八八・二六八〇）、「よくたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしのひ来にけれ」（巻十九・四一七二・四一四八）という例があり、平安期においても、「今日くれてあすかのかはのかはちどりひにいくせをかなきわたらん」（躬恒集・五八・ざふのうた）、「いづかたになきわたらんむかはちどりみやこのかたにことづてもせむ」（能宣集・二二八・秋たびをまかるに、かはづらちかきところにやどりてはべるに、ちどりのなきはべれば）、「暁やちかくなるらんもろともにならずもなく川千鳥かな」（増基法師集・五三・夜ねられ侍らぬままにきき侍れば、まことに夜中うちすぎるほどに、ちどりのなき侍りしかば）といった歌が列挙できる。その鳴き声を詠むことが多い。

「のにも山にも」という表現は、『万葉集』にはないが、勅撰集においては、『古今集』に、「君によりわがなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり」（恋三・六七五・よみ人しらず・題しらず）という歌が見出せる。評判が立つ意に霞を重ねて詠んだ例であるが、類例は他にも、「ひとめをもいまはつつまじはるがすみのにもやまにもなはたたばたて」（躬恒集・二〇一・ざふ）がある。また、「をやみなくふらばふらなむはるさめはのにもやまにもはなのさくまで」（麗景殿女御歌合・九・春雨 左勝）、「おほつかな野にも山にもしらつゆのなに事をかはおもひおくらむ」（村上天皇御集・一三二・朱雀院うせさせ給ひけるほどちかく成りて、皇太后宮をさなくおはしましけるを見たてまつらせ給ひて）は、それぞれ春雨や白露を詠む。『古今集』にはもう一首、「いづこにか世をばいとはむ心こそそのにも山にもまどふべらなれ」（雑下・九四七・そせい・題しら

ず）という歌があるが、心を詠んだ例としては、他に、「きみがすむのにもやまにもおもひやるころかるくやひとをわする」（斎宮女御集・一五一・御かへし）といった例が見える。いずれも、野山を一面に覆う情景や心情を詠んだ歌である。当該歌は、川に住む千鳥が、野山にも出て盛んに鳴く情景を詠んでいるが、鳥を採り上げた例としては、「しらねねばみをうぐひすのふりいでつつなきてこそゆけのにも山にも」（蜻蛉日記・上・二四・作者）という歌が挙げられる。

「なきみだる」という語は、「から衣よかせずしくなるなへにきりぎりすさへなきみだれつつ」（惠慶法師集・八三・きりぎりすのこゑ）という歌が見えるが、和歌の用例は稀少である。

#### 四四七二（しぎ）

##### 【本文】

あさはらにさようちふけてたつしぎのはこそしるらめひとりぬるよは

##### 【校異】 なし

【語釈】 ○あさはら 朝の草原。あるいは、所在未詳の地名か。その場合、「朝」を掛ける。 ○さよ 夜。「さ」は接頭辞。 ○しぎ シギ

科の鳥。「暁のしぎのはねがきもはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく」（古今集・恋五・七六一・よみ人しらず・題しらず）の後世への影響が大きく、当該歌も「鳴が明け方近くに大きな羽音を立てて飛び立つさま」（『歌ことば歌枕大辞典』『鳴』の項〈浅田徹氏〉）を詠んだもの。

##### 【通釈】

朝の草原で、夜が更けて飛び立つ鳴の羽にそっくりだと思ひ知るだろう。一人で寝る夜は。

【他出】

『歌枕名寄』未勘国上、九四七四番

朝原

あさはらにさ夜うち更けて恋しきはせこそしるらめひとりぬるよは

【考察】

「語釈」に挙げた『古今集』の歌は、夜明けに鳴が盛んに羽ばたきを繰り返す様子に、独り寝のさびしきで眠れずに夜明けを迎えた状態を重ね合わせる。当該歌では、この歌を踏まえて、鳴の羽とはこういうものだったのかと、独り寝をして迎えた朝に、我が身の有様でそれと知るだろうと詠んでいる。

「あさはら」は、『新編国歌大観』の用例を見ると、当該歌とその重出の他は、「さなへとるたごのひまなみ五月雨のふるも時しるあさはらのさと」（夫木抄・雑部十三・一四七六九・前中納言俊光卿・あさはらのさと 永仁大嘗会）という大嘗会和歌一例を見出すのみで、意外に少ない。

「ひとりぬるよは」の用例は、「秋なれば山とよむまでなくしかに我おとらめやひとりぬるよは」（古今集・恋二・五八二・よみ人しらず・これさだのみこの家の歌合のうた）、「花すすきそよともすれば秋風のふくかとぞきくひとりぬるよは」（後撰集・秋下・三五三・在原棟梁・寛平御時きさいの宮の歌合に）、「我が宿の軒のたるひのひまもなみさえこそまされひとりぬるよは」（大式高遠集・三六九・十一月）といった歌があり、結句に据えられる例は、『万葉集』にはなく、平安期に入ってから見える。

四四七三（しぎ）

【本文】

暁にはねかくしぎのうちしきりいくよかいもが（君に）こひわたるらん

【校異】○暁に―暁の（田）○うちしきり―打更て（しきり）（羅）○いもか君に―君に（黒・寛）

【語釈】○暁 夜明け近くのまだ暗い頃。○はねかく 羽ばたく。あるいは、くちばしで羽をしごく意とも。ここでは前者に従う。「暁のしぎのはねがきもはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく」（古今集・七六一）（前掲四四七二番「語釈」参照）の影響で、多くは鳴に用いる。○うちしきり「うちしきる」は、同じことが続けざまにたび重なる意。ひっそりなしに。「うち」は接頭辞。○いくよかいもが君にこひわたるらん 下句の音数律に合わない。元来は、「いくよかいもがこひわたるらん」「いくよか君にこひわたるらん」のいずれかであったか。可能性としては、「いもが」「君に」のいずれかが傍書され、ある段階で本文化したとも考えられる。ここでは、版本系本文に拠らず、万葉語「いも」を古い本文と見て校訂した（詳しくは「考察」参照）。「こひわたる」の「わたる」は鳴の縁語。

【通釈】

明け方に羽ばたく鳴のように、続けざまにいったい幾晩、独り寝をして、妻は私を恋い続けているのだろうか。

【他出】なし

【考察】

夜明け方の鳴の羽ばたきを数の多さの比喩として用い、また、鳴に独り寝のイメージを重ねながら、幾晩も独りで恋人を慕い続けている心情

を詠んだ歌である。

「語釈」でも触れたとおり、現存する写本系本文は、傍書の本文化と見られる箇所が存する。冒頭に掲げた校訂本文「いくよかいもがこひわたるらん」であれば、「こひわたる」のは「いも」（女性）であり、作者（男性）はその状況を推量していることになるが、一方、「いくよか君にこひわたるらん」では、作者が「君」を慕う歌になる。いずれでも意が解せるところから、伝来の過程で、二通りの表現が生まれたものと見られる。本稿では、前者と類似した発想として、『万葉集』に「ぬばたまの夜渡る月をいく夜ふとよみつついもは我待つらむぞ」（巻十八・四〇九六・四〇七二）という歌があることを参考に、版本系とは異なる本文に校訂した。なお、版本系本文は、『古今集』七六一番歌が女性性の立場からの作であることから、「君に」本文を採り、女の歌に訂した可能性がある。

「うちしきり」という語は、和歌においては、波や風について用いることが多く、「うちしきり立ちよりくともきしとほみよそにぞかへるおきつしらなみ」（清正集・八三・かへし）、「たかさこのまつをこゆべきしらなみはよるもあらしぞうちしきりふく」（宰相中将君達春秋歌合・四〇・あき）、「なかなかにうちしきりてはおきつなみたてれをれどもなき心地かな」（一条摂政御集・九六・まちじりのきみのもとに、しきりておはして、つとめて）、「ひらのやまもみぢよのまはいかならむみねのむらかぜうちしきりふく」（恵慶法師集・一二五・かぜのおとのたかきをききて）、「しらなみのうちしきりつつ今夜さへいかでかひとりぬるとかやきみ」（拾遺集・八五一・よみ人しらず・題しらず）といった用例がある。

「こひわたるらん」には、「冬河のうへはこほれる我なれやしたにながれてこひわたるらむ」（古今集・恋二・五九一・むねをかのおほより・題しらず）などの例がある。この歌の場合、「渡る」は「川」の縁語であるが、「しながどりゐなのふし原とびわたるしぎがはねおとおもしろきかな」（拾遺集・神楽歌・五八六）という例にもあるとおり、「（飛び）渡る」鳴は歌に詠まれており、「渡る」と「鳴」も縁語と見てよからう。

四四七四（しぎ）

【本文】

あかつきのしぎのはねがきもはがきあつめてぞわびしかりける

【校異】なし

【語釈】○あかつきのしぎのはねがきもはがき「暁のしぎのはねがきもはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく」（古今集・七六一）（前掲四四七二番「語釈」参照）の上句をそのまま用いた表現。序詞として同音の「かきあつめてぞ」を導く。○かきあつめてぞ「かきあつむ」は、搔き寄せて集める、一つに取りまとめるの意。

【通釈】

明け方の鳴の羽ばたきは、「百羽がき」というほどたくさんするとういが、あれやこれやの出来事を取りまとめて、全部がつらく悲しいことだ。

【他出】

『奥儀抄』下釈、五四一番

暁のしぎのはねがきもはがきあつめてもなげくころかな

『袖中抄』第十八、八八二番



あかつきの鳴のはねがきもはがきかきあつめても我ぞかずか<sup>なげくころかな</sup>  
『和歌色葉』下巻、二七二番

あかつきのしぎの羽がき百羽がきかきあつめてもなげくころかな  
『色葉和難集』第九、八九二番

暁の鳴の羽がき百羽がきかき集めても歎くころかな

『古今和歌集古注釈書引用和歌』『古今和歌集頓阿序注』一五八番

暁の鳴の羽がきもはがきかきあつめてもなげく頃かな

### 【考察】

結句「わびしかりける」は、諸本異同はないが、「他出」に掲出して  
いるとおり、『袖中抄』は「我ぞかずかく」になっている。前掲の『古  
今集』の歌の結句が紛れ込んだものであろう。ことほどさように、鳴の  
歌の表現のバリエーションはそれほどないと言える。また、「なげくこ  
ろかな」の傍書も、『古今六帖』諸本とは異なっており、「他出」に列挙  
している他の後世の歌集が、揃って採っている点、注意を要する。ある  
いは、それらの出典を、『古今六帖』以外に求めるべきか。

「かきあつむ」という語は、和歌においては、「掻き集む」と「書き集む」  
との掛詞として用いられることが多く、「時雨れつつふりにしやどのこ  
とのはかきあつむれどとまらざりけり」（村上天皇御集・一二二・中  
務・伊勢が集めしければたてまつるとて、「ころをへてかきあつめける  
もしほ草けぶりやいかならむとすらん」（能宣集・二八〇・たびたび  
ふみつかはす女の、かへりごとしはべらぬに）、「われのみとおもひつれ  
どももしほ草あまたのひとのかきあつめける」（為信集・五三・すべて  
人に物いはずといふ女の、見れば、けさうじけるをこのうたどもいと  
おほかり、返事もあれば、かきつく）、「ちりにけるたつたの川のみぢ

ばはかきあつむれどかひなかりけり」（長能集・二二二・かねずみの朝  
臣の家のものがたりをかりて返しければ、みちにおとしてければ、かき  
かへてやりける返事に歌よみておこせて侍りけるかへりごと、人にはか  
りて）といった用例があるが、当該歌では、筆跡に限らず、雑多な物事  
が「わびし」という感情を引き起こしたと解した。

四四七七（からす）

### 【本文】

夏のよのこもちがらすのさがぞかしよぶかく鳴きて君をやりつる

【校異】 ○君を―君や（林）

【語釈】 ○こもちがらす 巢で雛を育てている親鳥。和歌における用例  
は、『新編国歌大観』を検しても、江戸期の二例を数えるのみである。

○さがぞかし 「さが」は、癖、性分の意。「ぞかし」で、自己の考えを  
相手に主張し、自らも確認する心情を表す。 ○やりつる 「やる」は、  
送り出す意。

### 【通釈】

短い夏の夜の、子持ち鳥の性分なのだな。夜更けのうちに鳴くもの  
だから、（その声に促されて）あなたを送り出してしまったよ。

### 【他出】

『六華和歌集』卷第四冬歌、一〇五〇番

### 六

夏の夜のこもち鳥のさがぞとよ夜ぶかく鳴きて君をやりつる

### 【考察】

「他出」に示したとおり、当該歌は、『六華和歌集』では、一見、冬

部に配されているようであるが、『新編国歌大観』六華和歌集解題（井上宗雄氏・山田洋嗣氏）に拠れば、錯簡があり、「冬部一〇四二」―「一四七は恋歌」であるという。当該歌もこの一連の歌群に含まれる。「暁と夜鳥鳴けど……」（万葉集・巻七・一二六六・一二六三）という万葉歌（『古今六帖』にも当該歌の直前、四四七六番に載る）からも知られるように、鳥は、明け方に鳴く鳥である。それは、男性が女性のもとから帰る時刻を知らせる声であり、そこから、「朝鳥早くな鳴きそ我が背子があさけの姿見れば悲しも」（万葉集・巻十二・三一〇九・三〇九五）という歌も発想された（この万葉歌は当該歌の直後、『古今六帖』四四七八番に重出）。

夏の夜は短い。その上、雛を育てる鳥は、夜更けに鳴くこともある。当該歌は、少しでも長くふたりで一緒にいたいという思いから、そういう鳥へのうらめしさを詠んだものである。

下句「よぶかく鳴きて君をやりつる」は、まだその時刻ではないのに、鳥が鳴いたために夫を帰してしまったという状況を詠んだと解される。『伊勢物語』第十四段で、共寝をした男が「夜深くいでにければ」詠んだという、陸奥の女の歌「夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」(二二)は、当該歌と同様の立場の作と見られ、下句の表現がとくに酷似している。

なお、「きみをやる」という表現は、「はるばるにきみをやりてはあふさかのせきのこなたにこひやわたらむ」（躬恒集・一九九・くれのはる、ひむがしくにわかるるひとにおくる）に見出すことができる。

## 附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一二年度春学期の授業「文献講読」の内容の一部であり、また、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会（京都と文化）第17研究会、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成二十五―二十七年度）における研究の一部である。

四四五六・四四五八・四四七七番歌を福田が執筆し、その他は、「文献講読」受講生のうち、川内皇子（四四五四番）、餌取あや（四四六一番）、光川莉奈（四四七二番）、旗野紀子（四四七三番）、梅澤里奈（四四七四番）のレポートをもとに、福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器“eCSA Ver200”を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

## 〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖（20）千鳥／鳥―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに（ ）を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

- 第一巻 1古今和歌集ゝ4後拾遺和歌集
- 第二巻 1万葉集ゝ6和漢朗詠集
- 第三巻 1人丸集ゝ81赤染衛門集
- 第五巻 1民部卿家歌合ゝ61源大納言家歌合長久二年、253紀師匠曲水宴和歌ゝ269九品和歌、281歌経標式（真本）ゝ285新撰髓脳290新撰和歌髓脳、347古事記ゝ353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記ゝ393和泉式部日記、414竹取物語ゝ420落窪物語
- 第六巻 2秋萩集ゝ5麗花集
- 第七巻 1奈良帝御集ゝ36肥後集
- 3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数ゝ通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

- 〈例〉3ゝ19貫之355『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌
- 4、別出本文に異なる場合、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるのみに限る。
- 5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、へ参考ゝと記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌としてへ未詳ゝと記し、傍線を付す。

別出歌一覧

千どり

み山にはくもあなびき明けにけり川のせごとにちどりしば鳴く

〈未詳〉

秋くればさほのかはらのかはぎりに友まどはせるちどり鳴くなり

3ゝ11友則21「ゆふされば」、1ゝ3拾遺集238「ゆふされば」、2ゝ5金玉34「ゆふされば」、5ゝ52前十五13「夕されば」、5ゝ266三千人68「ゆふされば」、5ゝ267三十六56「ゆふされば」、5ゝ268深窓秘48「ゆふされば」、

1ゝ3拾遺抄143「冬さむみ」、2ゝ3新撰和140「ゆふされば」「さほの川瀬の」

おほ空にわたる千鳥の我ならばをふのわたりをいかになかまし

〈未詳〉

川千鳥すむかはのうへの立つ霧のまぎれにだにもあひ見てしかな

2ゝ1万葉2688「すむさはのうへに」「いちしろけむな」「あひいひそめてば」

山川のいしまがくれにすむ千どり人しれねばやこゑのきこえぬ

〈未詳〉

ちどり鳴くさほの川原のささらなみやむときもなくわがこふらくは

（おほとものさかの上郎女）

2ゝ1万葉529「さほのかはせの」「さざれなみ」「やむときもなし」「あがこふらくは」

さよ中に友よぶ千どり物おもふとわびつつあるに鳴きつつあやな（おほと

もの女らう)

2-1万葉 621 「わびをとるときに」「なきつつもとな」

いとどいとどものおもひをればかはちどりのにも山にもなきみだれけり

〈未詳〉

4462 おもひかねいもがり行けば冬のよのかは風さむみ千とり鳴くなり（つらゆき）

1-3拾遺集 224、1-3拾遺抄 583、2-5金玉 35、2-6和漢朗 358、3-

19貫之 339、5-264和十種 18、5-266三十人 19、5-267三十六 18、5-268深窓

秘 59、5-285新髓脳 7

よぶこどり

4463 こたへぬによるなとよめそよぶこ鳥さほのかはらをのぼりくだりに（あか人）

2-1万葉 1832 「なよびとよめそ」「さほのやまへを」、3-2赤人 132 「よ

びなをかしそ」「さほの山べを」

4464 とことはにきけはくるしきよぶこ鳥こゑなつかしきときには成りぬ（おほとものさかの上郎女）

2-1万葉 1451 「よのつねに」

4465 をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥かな

1-1古今 29、3-4猿丸 49、5-267三十六 59

4466 わがやどのはなになきそよぶこどりなくかひありてきみもこなくに（春みちのつらき）

1-2後撰 79 「よぶかひ有りて」

4467 神なびのいはせのもりのよぶこどりいたくななきそわがこひまさる（王子）

2-1万葉 1423 「あがこひまさる」

4468 たきのうへのみふねのやまのあしべよりきなきわたるはたれよぶこ鳥

2-1万葉 1717 「みふねのやまゆ」「あきづべに」

4469 いつしかもこえんとおもふあしひきの山に鳴くなるよぶこ鳥かも

3-19貫之 202 「こえてんとおもふ」「よぶこ鳥かな」

4470 朝がすみやへの山こえしよぶこ鳥鳴くやながくるやどはあらなくに

2-1万葉 1945 「あさぎりの」「やへやまこえて」「なきやながくる」「やど

もあらなくに」、3-2赤人 223 「あしひきの」「やへやまこえて」「なくや

ながくる」「やどならなくに」

しぎ

4471 暁のしぎのはねがきもはがききみがこぬよはわれぞかずく

1-1古今 761

4472 あさはらにさようちふけてたつしぎのはこそしるらめひとりぬるよは

〈未詳〉

4473 暁にはねかくしぎのうちしきりいくよかいもが君にこひわたるらん

〈未詳〉

4474 あかつきのしぎのはねがきもはがきかきあつめてぞわびしかりける

〈未詳〉

4475 はるまけて物がなしきにさよふけてとかはなくしぎたがためかなく

2-1万葉 4165 「はぶきなくしぎ」「たがたにかすむ」

からす

4476 暁とよがらすなけこの山のこずゑのうへはいまだしづけし

4479	4478	4477
2 1万葉 3542	2 1万葉 3109	2 1万葉 1266
「おほをそどりの」	「わがせこが」 「はやくななきそ」 「おほをそどりのまさでにもさまさぬ君をころくとぞなく からすとふおほおほそどりのまさでにもさまさぬ君をころくとぞなく あさがらすいたくななきそわぎもこがあさけのすがたみればかなしも あさがらすいたくななきそわぎもこがあさけのすがたみればかなしも 夏 のよのこもちがらすのさがぞかしよぶかく鳴きて君をやりつる （未詳）	「このをかの」 「こぬれのうへは」